

美術作家

丁子 紅子氏

1991年埼玉県生まれ。女子美術大学芸術学部 絵画科日本画専攻を卒業後、宝飾メーカーに勤務しながら作品を発表。退職後フリーに。現代童画会所属。同会で上野の森美術館賞や会員作家賞などの受賞を経て2019年に大賞を受賞。200人を超える若手作家の登竜門『KENZAN 見参』や伊勢丹で開催される『アートのチカラ展』で観客人気投票1位を連続で獲得。2017年、講談社文庫の桐野夏生著『顔に降りかかる雨』をはじめとする村野ミロシリーズの表紙に作品が採用される。中村月子 (avex trax) や a crowd of rebellion (ワーナーミュージック・ジャパン) のCDジャケットも手掛け、中村月子とのコラボレーションによるライブペイントも話題に。アパレルブランド『0658』のモチーフとしても作品が使用され人気を呼んでいる。

Twitter: <https://twitter.com/chbeni>



私の描く黒髪の女性は「心」を具象化したもの。 あなたの「心」を投影し、自由に感じてほしい。

日本画は画材が多彩で魅力的 油絵よりも自由に遊べる気がした

編 いつの時代にも、絵を描くのが得意な子どもはたくさんいますが、画家を志すとなると、かなり限られてくると思います。丁子さんの場合、どれぐらいの時期からそうした意識が芽生えてきたのでしょうか。

丁子 美術の道に進もうと決めたのは中学生のときです。もともと叔父が画家で、身近に絵が溢れている環境で育ったので、描くのも観るのも大好きでした。たまたま、美術科の専門コースがある高校が近くにあって、進路を考え始めた頃、受験したいけどどうしようかと迷っていたら、家族が「好きなだったらやってみれば」と背中を押してくれたんです。

編 数ある美術表現の中から、丁子さんは日本画を選ぶわけですが、早い段階から興味を持たれていたんですか？

丁子 入学した高校では、1年目に、油絵・日本画・彫刻・デザインなど一通りのことをやって2年生から専攻を決めることになっていたのですが、日本画の画材そのものに魅力を感じたのが選択の決め手になりました。キラキラした

ものや砂のような質感の画材などがたくさんあって、油絵よりも遊べるような気がしたんですね。

編 現在の丁子さんの作品は、いわゆる“美人画”が中心ですよね。昔から人物画が得意だったのでしょうか。

丁子 最初の頃は、日本画の画材の特徴を活かした抽象的な絵を描いていました。動物をモチーフにしていた時期もありましたが、人物は全然描いていなかったんです。

編 それは意外ですね。抽象画というと、若さが溢れる鮮烈なタッチで？

丁子 いえ、当時から私の絵は、陰と陽で言えば「陰」の部分を表わした暗めのもが多かったんです。もともと、目に見えない感情のようなものを表現したいという気持ちをずっと持っていて…。暗い部分も前面に出した“自分自身の心”のような抽象画ばかり描いていました。だから、大学時代の同級生たちはいろんなギャラリーから声がかかって作品が展示されているのに、私にはまったくそういうお話が来ない(笑)。それなら、すぐに画家として食べていかなくても、どこかに就職して絵を描き続けるのも一つの道かなと思って、就職活動を頑張りました。

編 入社したのは、クリエイティブな関係の会社ですか？

丁子 オーダーメイド・ジュエリーのデザインの仕事です。できるだけ人と関わる仕事をしたかったということもあり、お客さまとお話しながらジュエリーのデザイン画を描いていくのは自分に向いているかなと思ったんです。

「欲しい」と思ってもらえる絵を描く 芸術にもそんな考え方があっていい

編 デザイン画のお仕事が、ご自分の描く絵に、何か影響をもたらしましたか？

丁子 考え方に大きな変化が出ました。たとえばお客さまが古い立爪のリングをお持ちになり「リメイクしたい」と。ではどんなデザインに変えたいのか、どのように使いたいのかなどをお聞きしながら、私とそのイメージを具体的な絵にしていくわけです。それまで私は、絵というものを自分のために描いていたんですけど、仕事を続けているうちに、“お客さまの要望を聞いて提案しながら一つの作品を創る”という考え方が、絵にも必要なんじゃないかと気づいたんです。絵も、ジュエリーと同じようにお客さまの所有物になることがあるわけですからね。どうしたら「欲しい」と思ってもらえるか。「飾りたい」と思ってもらえるか。そうしたことをもっと考える必要があるんじゃないかと考え始めました。

編 それで、抽象画から、もう少しわかりやすい表現手法へと変えていったわけですか。

丁子 はい。もちろん花なども飾りやすいモチーフではあるんですけど、私がどうしても描きたかったのは“心”ですから、それを表現しながら、見る人に共感してもらい、お互いが心の奥底で繋がれるのは“人物”ではないか。どこの誰なのか特定できないような“女性”がいいのではないか、というところに行き着いたんです。

編 確かに丁子さんの描く女性は、美しくリアルなのに、なぜか生身の感じがしませんよね。

丁子 よけいな色をなくして表情もなくしてまっさらな状態にしたら、見る人自身の心が投影され、新しい何かが生まれてくるんじゃないかなと思い、まずバックは白、髪は日本人ならではの黒、そこに、血の色のイメージがある赤、この三色だけを使ってみることにしました。髪の色を、わずかも茶色などに染めると、そこに人物の個性や意思が生まれてしまうんですよ。

編 俳句ではありませんが、ぎりぎりの制約の中で表現するからこそ鑑賞者自身の心が映し出され、見る人ごとに見え方が変わってくると。もっと言えば、同じ人が見ても、日によって心象が変わったりもするんでしょうね。お話を伺って、あらためて丁子さんの美人画を拝見すると、心の持ち方でどのようにも見える感じ、よくわかります。



さよならでみた夢の続きを。

第45回記念現代童画展大賞受賞作。丁子作品の新境地とも言える、黒いバック、二人の人物を配した大胆な構図の作品。10年所属している現代童画会の公募展で念願の大賞を受賞。童画とはna ve artの意味で、精神的な純粋性を表現した作品が評価された。

女性像を通して「心」が姿を現わしたら どんなふうに見えるのだろう

編 新たな画風の美人画は、どのような場で発表なさったのですか？

丁子 初めてこのスタイルの絵を出品したのは、複数の画家が参加する小品展でした。小さめのサイズ2点のみでしたからジュエリーの仕事をしながらでも制作できたんですね。

編 評判はいかがでした？

丁子 予想以上に反響があり、買ってくださるお客さまもいらして。「絵って、本当に売れるんだ！」と感動しました(笑)。

編 これで専業でもやっていけるぞと(笑)。

丁子 絵で食べていけると思えるようになったのはいまの画風になって3年目ぐらいのときです。ちょうどその頃、会社の仕事との両立も難しくなっていたので思い切って退社してしまっただけです。でも、専業になってから、ありがたいことに展示のお誘いを受けすぎて、一枚一枚を大事にできなくなり、絵がダメになってしまっているなという気持ちがあ

りました。そのせいで体を壊して2カ月ぐらい寝込んでしまったんです。やる気も収入も失って、それでもやっぱり自分には絵しかないと考えたときにふと描いてみた絵が凄くいい感じで納得できるものだったので、そこから迷わず描けるようになりました。すると不思議なもので絵も順調に売れるようになったんですね。一度、持っているものを手放したからこそ得られた新たな手応えだったのではないかと思います。

編 最近は、美人画ブームもあり、女性像を描く画家が増えてきたように思いますが、その中で丁子さんの個性はかなり際立っているように見えます。

丁子 先ほども言ったように、自分のテーマはあくまでも「心」なんです。心が姿を現わしたらどんな形なんだろうという発想で描いているので、たまたま私自身が女性だから女性を描いているけれど、男性だったら男性の姿を描いていたかもしれません。美人画の中にも男性目線・女性目線それぞれのカタチがあり、他の画家の方々は、あくまでも私の印象ですが、そこに凛として生きている女性を描いている気がします。でも私は、生きているかないかと言うとちょっと怪しく(笑)、幻想的で、夢の中にふっと出てきた女性みたいな感じで描きたいんです。だから正統的な美人画の中に並ぶと浮いて見えるのかもしれませんがね。でも、それでかえって目立って、興味を持ってくださる人がいらっしゃるので、ありがたいことです。

自分が積極的に行動を起こせば 作品の可能性もどんどん拡大する

編 丁子さんの幻想的な美人画は、ポスターやCDジャケットなど、印刷物になることで一般の目に触れる機会

がずいぶんと増えましたが、商業分野とコラボするきっかけみたいなことはあったのですか？

丁子 最初のコラボはメガネブランド『VioRou』のポスターでした。私に絵をオーダーしてくださった与野本町(埼玉)の『テラスメガネ』という眼鏡屋さんで、VioRouのオーナーでありデザイナーである小野寺さんと偶然居合わせることがあって、その場で「この絵いいね！あなたの作品？ポスターにしたら面白いかもしれない」とおっしゃってくれたんです。それで、「じゃあ、やります！」と(笑)。トントン拍子に決まっていきました。

編 ポスターは、『LOFT国際メガネ展』で使われたそうですね。

丁子 会場に行ってみて、自分の絵がこんなふうに使われるのか、こんなふうに見えるのかと、とても新鮮な驚きがありました。そのとき実感したのは、自分が積極的に行動すればそれだけ作品の可能性も広がるんだということ。どんどん動いていくことが大事なんですね。

編 文庫本の装丁に使われることも多いようですが、そちらはどのように動いてコラボの機会を得たのですか？

丁子 Twitterがきっかけなんです。私は自分の作品や展示の情報をこまめにTwitterにアップするほうなんです。それをブックデザイナーの方が見てオファーをくださって、桐野夏生さんの『村野ミロシリーズ』(講談社文庫)に使っていただくことになりました。なぜかそのすぐ後にも別のブックデザイナーさんが、やはりTwitterを見て連絡をくださり、立て続けに仕事につながったんです。

編 不思議な波動の共鳴って、ありますよね。



コラボがコラボを呼ぶTwitterの凄さ リスクもあるが「使わない手はない」

丁子 Twitter経由のお仕事で、もっと驚くような偶然がありました。いまコラボしている『0658』というアパレルブランドは、私が個人的に好きで、Twitterのアカウントをフォローしていたんです。それで、最近描いたお花の絵をTwitterにアップしたらリツイートで広がっていき、それをデザイナーの方が見てリツイートし、フォローバックもしてくれましたね。そうしたら、『0658』と近い関係にある『a crowd of rebellion』というバンドのボーカルの宮田さんがそのリツイートを見て「ジャケットを描いてもらえませんか」と依頼をくださったんですが、翌日『0658』からも「うちの洋服とコラボしませんか」と声がかかって…。同じ絵をリツイートで見てほぼ同時に依頼をいただくなんて、しかも同人同士が偶然とても近い関係にあるなんて本当にびっくりしてしまい、あらためてTwitterの凄さを実感しました。SNSはリスクもありますが、私は「使わない手はない」と思っています。

編 SNSでの発信で気を使っていることはありますか？

丁子 Twitterで広まった画像では質感やディテールまではわからないから、日本画ではなくイラストっぽく捉えられてしまいがちなんですね。だからいつも、何とか実物の絵を見ていただきたいなと思っていて。私が、できるだけ間をあげずに展示の機会を設けているのは、業界の方だけでなく、たまたま私の絵を見て興味を持ってくださるような一般の人たちにも、実物を見てほしいからなんです。この絵好きだなと思ってフォローしたアカウントに展示情報がアップされていても、半年後とか翌年とかだったら、なかなか覚えて

いられないですね。でも翌月ぐらいまでなら予定に入れてもらえる可能性が高いんです。なので、できるだけ早く展示を企画して告知するようにしています。我ながら、年間を通じて凄い展示数だと思いますよ(笑)。

編 Twitter以外のSNSも使いますか？

丁子 最近TikTokにハマっています。凄くバズる(閲覧数上がる)んですよ。TikTokでは、私が絵を描いている様子をひたすら流しているだけ。ずっと線を引いているだけの動画なのに、面白がって見てくださったり、そこからリンクされているTwitterに飛んでフォロワーになってくださる人もたくさんいます。

編 TikTokはユーザーの年齢層が若いんですよね。

丁子 若い世代に興味を持ってもらえるのは嬉しいです。私もいろいろ刺激を受けられますし。

編 丁子さんだって若手アーティストじゃないですか。

丁子 いやいや。いまの若い人たちのTikTokの使い方を見ていると本当に上手で、うらやましくなります。「どうせ私にはこんなふうに使えないよ」って(笑)。

人と人との新たな出会いで 作品がジャンルを超えて繋がっていく

編 最近は平面の世界だけでなく、ミュージシャンや写真家との、ライブ的なコラボも増えていますね。

丁子 シンガーソングライターの中村月子さんは、もともと私の絵を「自分と重なるところがある」と感じて好きになってくださり、最初は「ジャケット画を描いてほしい」というご依頼をいただき、お付き合いが始まりました。私も月子さんの音楽が凄く好きでしたし、お話をしても性格的に似ているところが多く、一緒にいろいろやっていこうとい



うことになって。

編 音楽と絵画を融合したイベントですね。

丁子 はい。月子さんをモデルにし、月子さんの曲のイメージで私が絵を描くというもので、タイトルもお互いの名前から一字ずつ取って「紅月」としました。会場で彼女の歌に合わせて、ライブペインティングもやったんです。

編 月子さんをモデルにした女性像では、背景に月が描かれているのが印象的でした。

丁子 私は、自分が描く“誰でもない人物”を集中して見てほしいので、普通は、背景に何かを描かず白い空間のままにしておくようにしていたんですが、月子さんという特定の女性を描いていたら、彼女の名前の一文字でもあり、私にとっても思い出があるモチーフの「月」を入れてみたくなったんです。初めての試みでしたけれどまったく違和感がなく、「月を描いてこの作品は完成するんだ」って思えました。

編 今年(2019年)の夏に、写真家の横木安良夫さんと開催した企画展も、異分野のアーティストのコラボとして話題になりましたよね。

丁子 私の描く女性像は「モデルの山口小夜子さんに似ている」と言われることが以前からよくあったんですが、恥ずかしながら私は世代的に小夜子さんを知らないから、興味を持って調べていたらたまたま生誕60年で、いろんな雑誌や映画館で小夜子さんの特集をやっていたんですね。その中で初めて彼女の姿を見て、あまりの美しさに驚きました。

編 美しいのに、自己主張をなさらないんだそうですね。

丁子 そうなんです。服を見せることに徹底していて、モデルとしての自分を“マネキン”と呼んでいらしたほど“無”であることにこだわりをお持ちだったそうで、そこが、自分の絵とどこか通じるような感じがしました。

編 横木安良夫さんとの企画展は、どのような内容のものだったのですか？

丁子 カメラマンの横木さんが撮影した“生前の山口小夜子さんの写真”を私が絵にして、私が日頃、下絵を描くときモデルをお願いしている澁谷果林さんを横木さんが撮り下ろし、それをまた私が絵に描くという企画です。

編 ずいぶん凝った企画ですね。やってみていかがでしたか。

丁子 とにかく、小夜子さんを描くのが難しかったです！あまりにも美しさが完成されすぎていて、逆に絵にしにくいんですよ。「描く女性像が小夜子さんっぽい」というのと「小夜子さんそのものを描く」というのはまったく別のことなんですね。描いても描いても全然似ていかない気がして、最終的に納得できるレベルになるまで、とても苦労しました。でも横木さんには満足していただけたし、何より、小夜子さんの事務所の方や昔からのファンの方が来場し喜んでくださったので、苦しんだ甲斐がありました。同世代だ



日本酒「水鳥記^{あかつき}-紅月-

「フینگラスに合う日本酒アワード最高金賞」を受賞した「水鳥記」の新シリーズ「水鳥記-紅月-」。丁子紅子が中村月子をモデルにオリジナルラベルを作画。

中村月子が「水鳥記」のイメージソングを書き下ろし、貯蔵の日本酒「水鳥記-紅月-」に楽曲を聴かせ醸す。



けでなく、世代が違うアーティストの皆さんとコラボさせていただくのは、緊張しますが、刺激的で楽しいです。

絵画をもっともっと身近に暮らしの中に取り入れてほしいから

編 丁子さんの場合、展示会の数が多いだけでなく、開催する場所もユニークですよ。

丁子 “ギャラリーで絵を展示して買っていただく”というのは、画家にとって基本的なビジネスモデルの一つではあるんですが、私としては、ギャラリーに縁がないような人にも、まずは見てほしいという気持ちが強いです。だから、普段は絵なんか見ないという人も自然に目を止めてくれるような場所を展示会場に使わせていただくことも多いですね。カフェとか、ヘアサロンとか。ヘアサロンに来るお客さまは、私の描く絵の感じが好きな人が多いんじゃないかなと思い、そんな人たちに、髪を切りながらリラックスして見ていただきたいなあと、思っています。

編 実際にヘアサロンで展示会を開催してみて、お客さまの反応はどうだったのですか？

丁子 興味を持っていただくだけでも充分だったのに、予想以上に売れたんですよ(笑)。しかも、絵を目当てに来た人ではなく、そのヘアサロンのお得意さまがほとんど買ってくださったそうで、サロンの人も「大成功だ」と驚いていました。

編 絵画の作品以外に、画集、トートバッグ、葉、スマートフォンケースなどのグッズも作って、展示会場やインターネットストアで販売していますね。

丁子 私の絵を見て好きになってくださっても、さすがに、絵画作品を購入するのは敷居が高いと思うんですね。だからもっと気軽に所有できる物に展開して、絵画を、もっと身近に生活に取り入れてもらえたらいいなという考えでやっています。

編 生活に取り入れると言えば、この秋冬からご自分のファッションブランド『Choji Beniko』をスタートしましたね。

丁子 鑑賞する絵画だけでなく身に纏う絵画というのがあってもいいんじゃないかと以前からずっと考えていたんですが、『0658』のブランドとコラボしたときに、パターンや生産面でご協力いただけるというお話しがあったんですね。私自身もともと洋服が好きで思い入れもあったので、少しずつ準備を進め、今回ようやく自分のブランドとして立ち上げることができました。

編 奇を衒わない、本格的なブランドのようですね。

丁子 はい。単に絵がプリントされているのではなく細部のディテールにまでこだわって、シルエットや素材を含めた“すべてがアート”という感覚でやっています。個展のときに何度か絵と洋服を並べて展示してみたんですが、私の絵を知らない一般の洋服好きの方も興味を持ってくださり、嬉しかったです。



自身のブランド『Beniko Choji』のファーストコレクション“雷月花”より

「紅月」

ミュージシャン中村月子との出会いにより、モチーフに取り入れるようになった神秘的な紅い月を大胆にあしらったロングシャツ。ユニセックスなシルエットにもこだわった。



自身のブランド『Beniko Choji』のファーストコレクション“雷月花”より

「はなことば」

編 今後、さらに突き詰めていきたいことはありますか？

丁子 グッズやブランドへの展開も楽しいですが、結局、自分の原点は絵を描くことなので、これからも、コンセプトをしっかり定めて作品をつくり、展示していきたいと思っています。

編 丁子さんの個展はどれもテーマが明確で、会場もテーマに沿って作り込まれていると、毎回評判ですよ。

丁子 ありがとうございます。今年(2019年)の9月に『花言葉』をテーマに個展を開催したんですが、そのときは、花言葉からインスピレーションを受けて描いた女性の絵と、実際の花の絵をセットで展示して、花言葉は、書家である妹(丁子毬子氏)に短冊に書いてもらい、さらに、蝶々のオブジェを会場のあちこちにあしらうといったトータルな雰囲気づくりをして、皆さんに喜んでいただけました。次の個展での新たな試みとして、自分の絵の根幹にある“心を投影する”というコンセプトを極めるために、鏡をテーマに、楕円形のパネル使って展開しようかなと考えています。描きたいことやりたいことがどんどん浮かんでくるので、それをどんどん発表し、一人でも多くの方に見ていただきたいなと思います。

